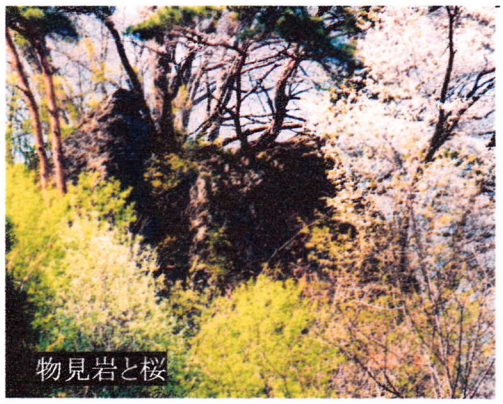
小滝街道　と 長谷堂城跡

山形市本沢郷土研究会

（2009年4月）

☆小滝街道は、昔から置賜地方と出羽最上地方を結ぶ重要な街道でありました。塩、漆、金銀、生活物資が南へ西へ運ばれ、越後の瞽女や祭文師などが往来した道でもありました。


物見岩と桜

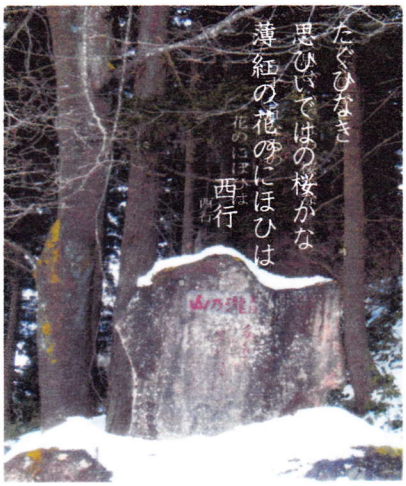
したがって、平安時代初期には早くも街道筋に滝の山という仏教寺院が有って三千坊と言われる程栄え、桜が保護されておりました。

☆平安時代の歌人西行法師が、今から八二〇年前この街道を通り、　又の年の三月に出羽の國にこえて　たきの山と申す山寺に侍りける　桜の常よりも薄紅の　色こき花にて並み立てりけるを　寺の人々も見興じければ

たぐひなき思ひいでは の桜かな薄紅の花のにほひは

と滝の山の桜を詠んで「山家和歌集」に載せております。

☆また、テレビに度々登場する政治家で実業家白洲次郎の夫人、作家の白洲正子は、小説「西行」の後書きに「ただ一つ書き残しておきたいところがあった。」と前置きして、



「…道がこみいっているのでなかなかはっきりしない。行きつ戻りつ何度同じところを右往左往したことか。何時間もそうして迷ったあげく、やっとそれらしいところに辿り着いた。道ばたに滝の山の歌を記した西行の歌碑があり、そこで道は二つに分かれて山へ入って行く。車は行かないので、暗い山道を歩いて登っていくと、一キロ半ほどで山ぶところの開けた台地へ出た。と、思いもかけず裏の山から下の谷へかけて、全山桜に埋もれているではないか。「常よりも薄紅の色濃き花にて、波たてりけるを」の形容にふさわしく、新緑にまざってもくもくと湧き上がってくるように見える。滝の山とは、花の滝の別名ではないかと思われるほどの眺めであった」…

と絶賛しております。

ちなみに、道の入り口には西行歌碑があるというものの、

雑草が伸び、迷いやすい道でしたので、今は道標なども立てて気軽に上れるようになっております。

寺院跡には杉の大木と小さなお堂や板碑の残欠が有り、胎内くぐり、物見岩、彼岸花の群落など、古代の栄華を束の間見ることができます。　街道の傍らには五月になると桜の他に、金色の花が咲く山吹の群落、藤の花などが新緑と和して美しく、また秋の紅葉も美しいところでもあります。

☆この平和な街道は度々戦乱に遭っていて、特に四百年ほど前の慶長五年秋、ご存じ総大将直江兼続率いる上杉二万の軍勢が最上に押し寄せるという大事件がありました。

昔の小滝街道

主力部隊は狐越街道という、ここから北の街道を越えて来たと言われておりますが、この街道（もっと古い街道も有る）も上杉軍の一団が越え、また傷ついた武士団が引き上げた道でもあります。「一本刀土俵入り」の作者長谷川伸が、この事件を素にして「小白府越え」という小説を書いております。ちょっと紹介しますと、

長谷堂の戦場から離れて十余町、南にさかのぼって小白府にやや近い処に人家はあるが人の姿はなく、犬も鶏も消え失せて、音といふもの全く絶えた村がある。その村に入って直ぐ――その夜は月、昼の如くであった。 途切れてはまた中空を漂ふ流れ雲に、光を晦まされて、地上は折々薄衣に包まるるが如き闇となる。それが却って幸いとして、前後に時々気を配りつつ、木ノ下闇、人なき家の廂の下をなんども飛び飛びに辿って急ぐ男がある。具足を着慣れた形で知れる、それは武士だ…

という書き出しで、この戦乱の渦中の、小白府村での若い男女の物語を書いております。

☆また、ここから数キロ先の「丸森」集落では九月十三日、上杉軍の兵士たちに餅を食われてしまったので、翌年からは、十三夜の餅はやめて、十八日の山の神祭礼と一緒に、朝、餅米を水にひたし、夜搗いて食べるようになった、と伝えられています。　山元地区には、七観音というのがあって、いずれもが高所で、街道を見下ろせるところに建っているそうで、国境を守る長谷堂城の楯（国境警備）の役割を持っていたとも言われています。

☆上杉軍の兵士がどんな気持ちで峠を越え、傷ついた体でまた越えたのか、知るよしもありませんが、江戸時代の

道は狭く急坂で、しかもカーブが多く、さぞかし苦労したことと思いますが、昭和になっても冬はバスがストップするため、第一級の僻地でもありました。　千丁金と呼ばれる付近は、バスはスイッチバックで回らなければならなかったほどの急カーブが有りました。

街道沿いには、あの有名な「山びこ学校」があり、教鞭をとった無着先生は長谷堂城主の菩提寺、清源寺別院沢泉寺（直江兼続が陣取った所）で生まれました。さすがの無着先生も冬は通うのに苦労したらしく、ここに下宿していたそうです。

☆その清源寺は城山の麓にあって、歌人結城哀草果の歌碑が立っております。

蔵王山をま向うにして撞く鐘は朝励め夕は憩へと
鳴里わた留か毛

☆長谷堂城趾を前景にした蔵王連峰はまことに雄大で、裏側は援軍の伊達領、また北方には月山があり、その裏側庄内は上杉領で、向うからも一斉に最上領目指して攻め入ったため、関ヶ原の合戦が東軍勝利で終わったから良かったものの、まさに最上は風前の灯火といった状態であったようです。

☆昭和四十年頃の大水害をきっかけとして小滝街道は大改修が行われ、現在の三四八号線に生まれ変わって、白鷹町、山形間を三十数分で結ぶようになりました。左上にはそれよりもっと古い街道が保存されていて、磨崖仏、馬頭観音、松木塔、犬供養塔　などが沢山祀られており、下の断崖絶壁を見ながら旅の安全を祈った人々の息づかいを偲ぶことができます。

☆この絶壁の下を流れる本沢川は間もなく、これから訪ねる長谷堂城の腰を回り、かつては堀の役目を果たして、やがて須川に合流し最上川に注ぐのですが、この本沢川を如何にうまく利用するかが城を守るキーワードで、長谷堂城が持ちこたえたのは実に母なる川の本沢川のお陰でもあります。というのは、享保年中、今から百七十年程前に書かれた軍記には

…此の堰々を水下にてせき留めしかバ、水たたえて満々として池の如くに見え、田も畑も一面に堀際まで水なれば、此処より敵寄るべき様もなし…

と書かれております。　合戦の様子を描いた古い絵図が添えてあり、一面の水田（ぬかるみ）が城を取り囲んで沢山あるのがおわかりかと思います。中央右が長谷堂城、左上が須川を前にして最上勢、中央下が直江兼続以下上杉軍で旧暦九月十四日、火ぶたが切って落とされました。　このぬかるみの攻防戦で上杉軍の侍大将上泉主水（上泉伊勢守の子孫）が討ち死にしたとも書いております。

☆のちにこの村の人々はその武勇を惜しんで主水塚を、他に伊達からの応援軍の武将湯目重旧、伊達政宗の母の護衛役加藤掃部左衛門、併せて無名戦死者の供養塔をそれぞれ建てて、毎年欠かさず供養しております。

☆直江兼続が、小山辺りにいる徳川家康との対決を避け、最上に攻め入ったのは何故でしょうか。上杉謙信ならば家康なにするものぞと、蹴散らしてしまったかもしれませんが、もし豊臣方が勝っていれば、参戦しない上杉への非難が出てきて、勝利への評価は小さいものになったと思われるからです。　これは今もって大きな謎で、意見が分かれるところで、皆さん考えてみて下さい。　☆この城を任されていた大将は「志村伊豆守光安」という、最上義光から最も信任厚い文武備えた智将でありました。　直江山城守VS志村伊豆守。派手な直江に地味な志村。この対決、戦の顛末だけでなく人間対決研究もまた面白いのでは？

☆　さて、戦争は、何時の時代でも非情で血なまぐさいものであります。人々はこの戦について殆ど語ることなく思い出から消そうとし、語られ始めたのは数十年を過ぎてから

清源寺付近から見た長谷堂城跡

でした。　今、長谷堂城趾城山は平和の砦として装いを新たにし、桜を植え彼岸花などの保護に努めております。

☆　いつかまた、この城山を訪ね二の丸跡の観音堂など参拝しながら、ゆっくり時間を過ごしてみてください。